

# 身近にみられる動物たち

布 村 昇

春になりました。雪がとけて、草や木の芽がふくらむころになると、さまざまな動物が活動を始めます。たまには、かれらのようすをじっくり観察してみませんか。自然を観察することは意外に楽しいことです。私たちが観察できる自然は身近にそして数多くあります。自分の家の庭でも会社へ行く途中の公園や学校へ行く途中の川の土手でもいいのです。このようなところにはどのような動物がすんでいるのでしょうか。鳥やけもの、こん虫やクモなどおなじみの動物の外に、わりあいその正体が知られていないものや、性質が知られていない動物が多いものです。30分でも1時間でもいいですからかれらをたずねてみてください。

## 1 コウガイビル

湿った石の下や、台所の流しの下などをのぞいてみましょう。図2のような体長5~10cmくらいの奇妙な動物を見たことはありませんか。体はヌメヌメしていて平たく、頭が半月状になっています。これがコウガイビルで、その名は、むかしの女の人がかみの毛をかきあげるために使った道具のこうがい(筍)というものに、この動物の頭をみたてて名づけたものです。

ところが、コウガイビルは名前こそヒルですが、



図1 身近な自然をしらべてみよう



図2 クロスジコウガイビル。(他に線のないクロイロコウガイビル、3本線のあるミスジコウガイビルなどがある。)

じつはヒルのなかまではありません。答を出す前に、コウガイビルの体をよく調べてみましょう。まず、ヒルと違って体に節(ふし)がありません。もちろん足もありませんし吸盤もありません。目は非常にたくさんあり、半月形の頭の部分やくびにあたるところなどに配置されています。また、運がよければ、コウガイビルの食事に出くわすかもしれません。コウガイビルは、どう猛な肉食者でミミズやカタツムリなどを襲って食べます。口は腹のまん中あたりにあり、えものをつつみこむようにして食べます。腸は口から前方に1本、後方に2本、計3本ありますが、肛門がなく消化しないかすは口から吐き出されます。また、このなかまにはメスとオスの区別はありません。みんな親になると、ひとつの体に卵と精子ができるのでメスであり、オスでもあるのです。このような動物は雌雄同体(しゅうどうたい)の動物とよばれています。

さて、この動物の正体ですが、じつは溪流にいるプラナリアや海岸にいるヒラムシと同じ扁形動物の渦虫(うずむし)のなかまです。扁形動物には渦虫のなかまのほか、ジストマなどの吸虫のなかまや、サナダムシなどの条虫のなかまがあります。

ちなみに、ヒルのなかまは、環形動物という比較的高等な動物で、ゴカイやミミズなどと同じグループの動物です。気もち悪そうな動物でも、よく観察しているうちに親しみもわき、自然を理解する強力な第一歩となるでしょう。

## 2 オカダンゴムシ

庭や公園などの大きめの石の下や落葉の下をの

ぞいてみましょう。ヤスデ・ゲジゲジ・アリ・ゴミムシ・ミミズなどにまじって、1cm足らずのまんまるな虫がよくみつかります。この虫は足がたくさんあり、びっくりすると、クルッと丸くなる性質があるので、子供たちはマルムシとかマムシとかテマリムシとか呼んでいます。実は正式な和名はオカダンゴムシと呼ばれる虫です。

ところで、“たくさん”の足を持っている虫という表現では科学的とはいえません。じっさい、この虫を手にとって、足は何本あるのか、体の節はいくつあるのかなど調べてみましょう。肉眼で見えにくい時は虫めがね(ルーペ)を使って調べてみましょう。そして、できればスケッチをしてみましょう。一生けん命スケッチをするうちに、自然に足・体の節・触角(アンテナ)の数や形や大きさなどを調べていることになりますし、また虫のその他の性質についてもいろいろなことがわかってきます。そして、その生物ばかりでなく、もっと広く、自然というものを理解する糸口のひとつをつかめるものと思われれます。本やテレビからの知識だけでなく自分の目や耳や鼻で確かめようとする態度が大切でしょう。

さて、このオカダンゴムシですが、胸の部分の7つの節と14本(7対)の足があります。次に板状のものが10枚(5対)あります。前者は胸の部分から出ているもので胸肢(きょうし)と呼び、後者は腹の部分から出ているので腹肢(ふくし)と呼びます。胸肢は歩くために使われており、腹肢は呼吸に役立っています。また触角(アンテナ)はよく見ると大きな1対のほか小さな1対が

あり、合計2対(4本)あります。またメスの親の腹には赤ちゃんを育てる袋があります。卵でかえるのではなく子虫の形で生まれます。一生で最も死亡率の高い時期を安全に過ごすことは、結局たくさんのなかまをふやすことになります。

ところでオカダンゴムシはこん虫でもヤスデでもクモでもなく、エビやカニと同じ甲殻(こうかく)類なのです。ここで、こん虫や甲殻類の属している節足(せつそく)動物の主なグループのちがいを整理してみましょう。

この節足動物のうち陸上で繁栄をきわめている王者はこん虫ですが、甲殻類はさしずめ「海のこん虫」とでもいうべきでしょう。海の甲殻類にはミジンコ・ケンミジンコ・フジツボ・アミ・オキアミ・シャコ・エビ・ヤドカリ・カニ・ヨコエビ・スナホリムシなどたくさんのグループがあり、数多く生息しています。オカダンゴムシはその中でスナホリムシやコツブムシなどのなかまの等脚(とうきゃく)類に属しています。海産等脚類の一部が、陸上へ進出し、フナムシのような海と陸のさかいにすむ段階をへて完全に陸上に適応したものがでたと考えられます。海の動物群である甲殻類のなかにあって、オカダンゴムシのなかまは最も陸上生活にうまく適応したグループといえましょう。

ところで、オカダンゴムシは今では町や村できわめてふつうに見られる虫ですが、古い時代の記録には見あたりません。たぶん明治時代になって外国との交流が盛んになってから日本に入り、広がったものなのでしょう。大正時代から昭和のは

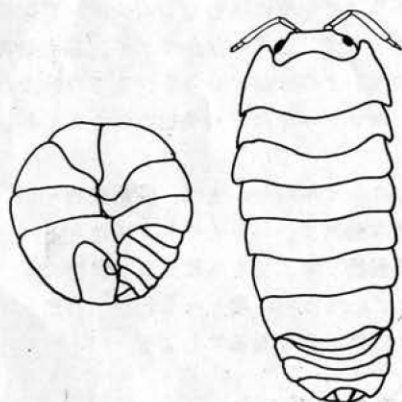


図3 オカダンゴムシ。左は丸くなったところ

グループ名	触角	体つき	足の数	主ななかま
ウミグモ綱	なし	頭+胸+腹	8本	ウミグモ
メロストマ綱		頭+胸+腹+後腹	12本	カブトガニ
クモ形綱		頭+胸+腹	8本	サソリ・クモ・ダニ
甲殻綱	2対	頭+胸+腹	10本	エビ・カニ
		(または頭+胸+腹)	14本 その他	オカダンゴムシ・ヨコエビ フジツボ・カブトエビ
倍脚綱	1対	頭+胸	多数	ヤスデ
唇脚綱		頭+胸	多数	ムカデ
昆虫綱		頭+胸+胸	6本	トンボ・チョウ・ハチ

じめごろになると園芸の害虫として知られ出したようです。また、このオカダンゴムシのなかまには、日本ではもう1種ハナダカダンゴムシというのが知られているだけで、ヨーロッパでは100種以上も知られており、おそらくもとヨーロッパでたくさんの種類に分かれたもののなかのごく一部だけが、日本へ侵入したものと思われる。

オカダンゴムシは、また都会の虫といえます。私が前に勤めていた大阪市の博物館でも開館する前から、誰よりも先に、大勢で押しかけてきたらしく、おびただしい数のオカダンゴムシとその死がいの山が見つかりました。面白いことに山の森の中の落ち葉や石の下などにはみつかりませんが人がすみつき、家や宿屋ができるときまってオカダンゴムシがすみついているのがみられます。オカダンゴムシは人間とともにすみ場所を広げる虫といえましょう。

### 3 庭にいるヘビ

春になって冬眠からさめ活躍しだす動物にヘビがあります。世の中にはヘビが大好きな人もいますが、大それた人も多く、草むらにひもや縄が落ちているのをみつけても、飛び上がる方もいらっしゃるようです。さて都市といっても富山あたりの住宅地などではまだかなりのヘビがみられます。町のヘビにはアオダイショウ・シマヘビ・ヤマカガシ・マムシ・ジムグリなどがみられます。

このうちアオダイショウは都会化の著しいところでもよくみられる大きな無毒ヘビで、ネズミや鳥やカエルを食べています。シマヘビは郊外では最もよく見られるヘビで黄かっ色の縦のすじがあるのが特徴ですが、体色の黒いものもあります。主にカエルを食べていて気の荒いヘビです。その他の無毒ヘビではジムグリなどがみられるようです。

有毒ヘビの代表はマムシで富山市内でも呉羽山などの林に多いようです。頭が三角形で体はずんぐりしたヘビで、トカゲ・カエル・ネズミや小型のヘビなどを食べています。上あごの毒芽から注射される毒と温度差によって敵を知る“赤外線感知器”、とでもいうべき働きをするピット器管がマムシの兵器といえましょう。またマムシは夏に5～6頭の子供を産みますが、卵でなく子ヘビの形で産みます。

ふつうは無毒ヘビとされるヤマカガシも実は二重の毒を持った毒ヘビです。そのひとつはくびのところから出る粘液で、これが目に入ると激しく痛み、失明することもあります。また、かまれた例は少ないのですが上あごの奥の方のキバの付近から分泌される毒は猛毒で、体内出血がひどく、死んだ人もあるそうです。

〈ぬのむら のぼる：動物担当主事〉

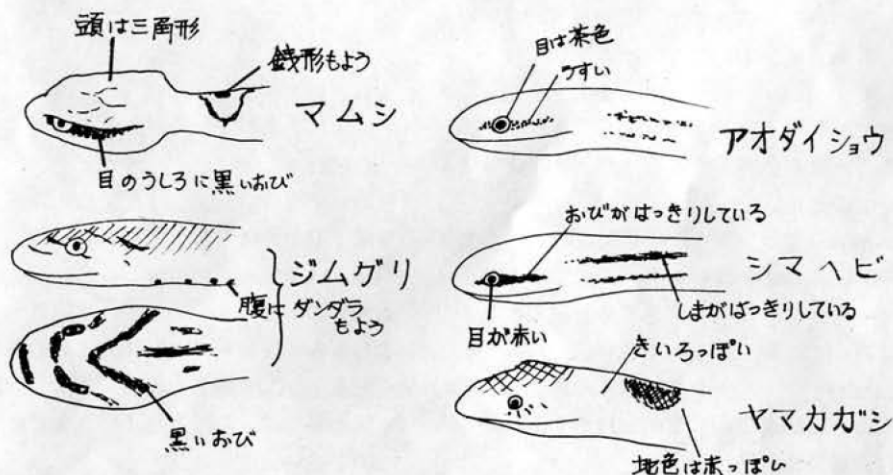


図4 町の中のヘビ